

## タイ ～仏の輝き～ タイ仏教美術の熱風

東京国立博物館・平成館（上野公園） 2017.07.04～08.27



本展は、2017年が「日本とタイ王国修好130周年」に当たる節目の年で、仏教国タイの前史の古代の黎明期の「スコータイ朝」、国際交易国家「アユタヤー朝」、現在の「ラタナコ王朝」における仏教美術の名品を通して、タイ王国の歴史と文化を鑑賞できる特別展として開催されている。

タイ王国では、「仏教」は人々の暮らしに寄り添う大きな存在であり、長い歴史の中で「仏教文化」が開花してきたが、今回東京・上野の森に「微笑む美男仏」や「優雅な姿の仏像美術の明宝」の選りすぐり「140件」の仏像が集結している。

### 《仏陀座像》 15世紀

「スコータイ」とは、“幸福な夜明け”の意味で王朝は短命ながら限りなく建設的で、あらゆる美術分野において多彩な民族様式を生み出し、タイ美術の模範の独立国家スコータイを作った。

「仏陀座像」は、15世紀のスコータイ時代に制作された像で、穏やかに笑みを浮かべた表情は、まさに安寧（社会の秩序が保たれて平和なこと）を願うようで、台座に後の一人が平安な来世を願って寄進したことが記されている。



### 《金象》 15世紀初

14世紀から400年余の長期にわたって国際交易国家として栄えた「アユタヤー」の時代には、国王が莫大な富を蓄え、この時代の彫刻は「青銅製（ブロンズ）の仏像」が主である。

タイでは「白象を得た国王は人徳が高い」と信じられていて、“象は王の象徴である”とされて、「金象」は金と貴石で彩られたまことにゴージャスな作りとなっている。

